高良興生院・森田療法関連資料保存会

ニュースレター　あるがまま　No.１３

２０１８年１１月発行

保存会は、来年で結成後 20 年目になります。そこで 2006 年に当会が発行した小冊子『高良武久先生を支えた人たち—野村章恒先生と竹山恒寿先生』から、初代会長の故・藤田千尋先生の特別寄稿文（2005.7. 9）を抜粋して掲載しました。（編集担当）

保存会の三葉の写真が物語る世代間人脈の交流による「森田療法」の発展

藤田　千尋（1923～2014、常磐台神経科）

仄聞ではありますが、この保存会の主な役割も、やがて実現の運びとなる森田療法センター（慈恵医大第三病院）を拠点に総合的な活動の一つとして総括されることになるでしょう。しかし、それはそれとして、現行の保存会の役割は、今後も引き続き行うことに変わりはないと思いますが、もし、仮に保存会の存否が話題になるようなことがあれば、この発足の原点に立ち戻り、その趣旨を思い起こして頂ければ幸いです。

ところで、この「高良武久・森田療法関連の資料保存室」が完成して間もない頃のことでした。誰も居ない資料室に初めて入って、先ず私の目についたものは正面の壁に飾られた森田・下田・高良先生の三葉の写真でした。

その時、私は、この先生方の遠い過去の偶然な出会いを思い出していました。それは今日の森田療法の発展につながる記念すべきことでした。しかし、やがて、私の連想は自然に、かつての慈恵医大の精神科や高良興生院を拠点に始まった森田療法の世代的人脈をめぐる物語へと移って行きました。

森田先生と私では世代的にかなりの開きがあって、森田先生から直接お話を伺うことは叶いませんでしたが、先生の著述や、あるいは高良先生などから伺った挿話の数々は、私にとって直接の体験にも増して心に残るものがあったように思います。

森田、下田両先生は、東京大学精神科の呉先生の門下でありましたが、普段はそれほど親交はなかったようです。ところが、下田先生が 1926 年に出版した「最新精神病学」第三版の序文で、森田先生の神経質学説やその療法を高く評価し、紹介したことから、深い友好関係が結ばれたと聞いていました。その交流に高良先生が加わることになりますが、この３先生の出会いは、高良先生にとって、また森田療法にとっても、まことに運命的な出会いと言わざるを得ません。周知のことですが、下田先生から推挽された高良先生は、1931 年、森田先生に師事することになり、それから数年たった 1935 年から後は、先師の衣鉢を継いで慈恵医大の精神医学講座の二代目主任教授となられました。また、1940 年からは大学と高良興生院を拠点に森田療法を中心とする研究、教育、そして臨床の生活が始まったのです。

その間、半世紀に亙る高良先生及び世代間の人脈的結束から、やがて誰言うとなく「慈恵学派」、「森田療法学派」と呼ばれる「アカデミックな伝統と学風」が育くまれ、森田療法は

一層根強いものに成ったのです。

この歴史の流れを振り返ると、今、私が立っているこの「資料保存室」の所在も、かつては多くの欅の木に囲まれた静かな雰囲気が感じられるところでしたが、それはまた、過去に様々な物語りを生み出した森田療法の歴史的な「場所」でもあったかと思うと、一層私には、立去り難い懐しい思いに駆られた一時でした。

私が新人の頃は、実地に精神科の臨床を学ぶ場が大学になかった関係から、高良興生院の存在は「森田療法」を含めて精神療法を志す者には相応しい研修の場でもありました。

それは「森田療法」の臨床を通して治療することの意味を学び、さらに、その「伝統と学風」を身をもって日常的に体験できる場所という認識がありました。しかし、残念なことに、私にはこの興生院での研修経験がないために、今になって、殊更その思いが強いのかも知れません。

そうした追想の中で、ふと私はこの三葉の写真を見詰めながら、これまでの物語の内容とはまるで逆のことを考えて居る自分に気づきました。それは、もし仮に下田先生が九州大学に赴任することがなく、また、先生が森田療法に深い関心を持つこともなく終っていたとすれば、当然、高良先生と下田先生との出会いは実現せず、また、高良先生が森田先生と出会うこともなかったでしょう。それに、若い頃は、生化学的方法論や精神分析学にも関心をもった高良先生がその方向へ進むことはあっても、慈恵医大への転出や森田療法を畢生の専攻課題にする事は無く、高良興生院の存在もあり得ないことでした。そして、今、こうして昔を振り返る私自身も当然、ここには居ないということになります。

この運命的出会いのいたずらを考えている内に、いつの間にか「音容日に遠し」という言葉を思い浮かべていました。

◆――◆

高良先生の元別荘、真鶴「森の家」を訪ねて

京都森田療法研究所　　**岡本　重慶**

去る平成 30 年 5 月 27 日、保存会の総会を兼ねて、真鶴半島にある高良武久先生の元別荘を訪ねる日帰り旅行が開催された。私は以前からこの半島に妙に関心があった。地図上に存在するが、その存在を主張していない不思議な半島に思えたからである。高良先生の別荘がそこにあったとは。自分の不思議の中に、さらに高良家の人びとのことが加わった。私が理解してもいいのだろうかと逡巡しながら、別荘訪問の貴重な旅に参加した。関西在住の私だが、保存会への入会を認められて数年になる。まだ新参者の私も加わって、総勢 14 名のグループだった。

真鶴半島は細長くて、尾根に向かう道路も狭い。その道をタクシーで少し登った地点から、右に下がった、半島西側の斜面の敷地に別荘があった。思いがけず、訪問記を書く機会を頂いたが、なにぶん知らないことが多い。そこで高良留美子様におたずねしたところ、丁寧なお答えを頂戴した。それを頼りに、この別荘の歴史を簡単に記すことにする。

それは昭和 28 年前後に、高良先生が家屋つきのミカン園を購入されたことに始まる。その後、「父の家」（高良先生の書斎）、「石の家」（とみ様のお住まいになった）が建てられた。そ

して高良先生のご逝去後に、長女の真木様がアトリエ兼自宅として「木の家」を建て、そこを高齢者が共同生活をする家になさった。真木様がお亡くなりになってから、「木の家」は一般社団法人、真鶴「森の家」となった。

私たちはこの家を訪れたのだが、贅を尽くした大きな建物で、海側に面した大広間で総会が開かれた。「森の家」の名の通り、外はさながら森で、海への視界は遮られているが、高良先生は遥かなる鹿児島を懐かしんで、海に面したこの地に別荘をもうけられたのであろうか。

先生は晩年の「真鶴の庭で」と題した随筆で、ミモザの花のことを書いておられる。ミモザは冬に黄色い花をつける。南仏のニースあたりを主産地とするミモザは、ヨーロッパでは春を告げる花として愛でられている。「ミモザ館」という古いフランス映画を思い出した。母親のような女性と若者との間の愛と葛藤が南仏を舞台に描かれた映画だった。『誕生を待つ生命』という、ミモザの花のような高良美世子様の著作集も読んだ。昭和 30 年に高良先生がパリ留学中の真木様を訪ね、その際にパリ大学で森田療法の講演をなさったという経緯を知ったのは、この本の巻末年譜からである。

◆――◆

２０１８年　春の心の健康講座のご報告

高良興生院・森田療法関連資料保存会　事務局長　**足立　美知子**

保存会主催の「春の心の健康講座」を４月、５月と２回開催しました。

１回目は、『生活に活かす森田療法』のタイトルで**増野肇先生**（ルーテル学院大学名誉教授）にお話を伺いました。

◆増野肇先生のお話「日常生活の中の森田療法とは」から―――

・悪いところを治すことにこだわらないで、自分の良いところを増やしていこう。
・強迫行為は不安を取り去る一つの方法である。生活の中で強迫を活かす視点を持とう。
・目を外に向けて、自分にとって関心があるものを見つけていこう。
・頓悟（とんご）よりも漸悟（ぜんご）
　大きな悟りより、日常生活の中で少しずつ気付いていければいい。
・どんな時に笑顔が出るか、楽しくなることを見つけて増やしていく。
・増野式サイコドラマの奨め
　問題を解決するサイコドラマより、その人の楽しい世界を広げていくサイコドラマ。
　サイコドラマでいろいろな自分を引き出していこう。

増野先生からたくさんの安心を受け取りました。

参加者は２５名でした。

◇　　◇　　◇

２回目は『社会教育と森田療法の合流―下村湖人から水谷啓二へ』の全体タイトルで**比嘉千賀先生**（ひがメンタルクリニック院長）と、**岡本重慶先生**（元・三聖病院勤務医、京都森田療法研究所）お二人の先生にお話を伺いました。

◆比嘉千賀先生のお話「社会教育の流れから生まれた自助グループ『生活の発見会』」から―――

生活の発見会は森田療法を研究・実践していく自助グループである。その礎を築いたのが比嘉先生の実父・水谷啓二である。水谷の生い立ちから、森田療法との出会い、そして、熊本五高時代と、比

嘉先生のお話は水谷啓二の人物像を生き生きと蘇らせていく。五高は、また、森田正馬の母校でもあり、そこには心の再教育である社会教育が育まれる土壌があったことが窺える。

昭和３２年に生活の発見誌第１号が、水谷と永杉喜輔らにより創刊される。それから約６０年、１巻も欠かすことなく今年８月に第７００号をむかえた。

水谷と永杉が生活の発見誌に込めた二つの念願【神経症の克服と人間回復：生きる力を育む社会教育の実践】。森田療法の流れと社会教育の流れは一つに合わさり、今も生活の発見会の根底に流れる。

◆岡本重慶先生のお話「前史としての社会教育の流れ」から―――

田澤義鋪、下村湖人、永杉喜輔らのような社会教育者たちを輩出した熊本五高。五高出身者たち、それぞれの人物像を追ってみると、社会教育の流れと、その本質がみえてくる。

下村らが重視した社会教育とは、制度中心ではなく個人の自律性を涵養し、社会集団の質を自治的に高めあっていこうとするものであった。

また、下村らが提唱した『平凡道を非凡に歩め：凡人の道を丹念に修めれば偉人になれる』は森田療法の治癒像に通じるところがある。

個々人の自律を高め、友愛によって互いに成長し合う社会教育の本質を実践していった五高出身者たちの思いは現代に生きている。

第２回目の参加者は４６名でした。

今回の講座は森田療法と社会教育とをあらためて学ぶ機会になりました。これからも心の健康について、皆様と一緒に考えていきたいと思っています。

◇ お知らせ ◇

贈呈図書

①畑野文夫氏から――中村古峡の著書５冊。　『神経衰弱の正体』　『病弱から全健康へ』　『青年と性的神経衰弱』　『作業療法の指導と其の治療的効果』　『神経衰弱はどうすれば全治するか』

②増野肇先生から――『生活の発見』誌ほか。

③郷　好文氏から――小松信明との共著『家族医』―心の病がなおっていく道。

来年前半の行事

❖**春の講座**；第一回目　2019 年３月９日（土）１３：３０から

テーマ；**『森田、モレノ、増野』**　・・・・・　講師　**増野　肇**先生

※精神科医ヤコブ・レヴィ・**モレノ**（Jacob Levy **Moreno**、1889～1974）は、サイコドラマ（心理劇）、ソシオメトリーの提唱者として知られる。グループセラピーの開拓者の一人。

❖**春の講座**；第二回目　2019 年４月２０日（土）１３：３０から

テーマ；**『対人恐怖症から「森田療法の誕生」を書くまで』**・・・講師　**畑野文夫**先生

❖**総会＆講演**　2019 年**５月１９日**（日）１３：００から　※講師は未定

■編集／発行　　**高良興生院・森田療法関連資料保存会**

◇連絡先　　〒161-0032　東京都新宿区中落合 1－6－21　就労センター「街」内

☎03－3952－9975　　ただし、火・水・金曜日の 10 時から 17 時まで。

◇電子メール　info@hozonkai.net

◇ホームページ　http://www.hozonkai.net/　※最新の講演情報などをご案内しております。